

ネオリベが日本にもたらしたものの —— 現代のソーシャルワークとその課題 ——

生 江 明

はじめに

高額所得者の減税措置の導入と非正規雇用の合法化が拡大されて以来、小泉政権以後(2001～06年)の日本社会はドラスティックな構造変化を遂げてきた。幸福を手に入れるための社会方程式に根底的な変化が発生したとも言える。グローバルイゼーションに適応する為に必要であるとして、「規制緩和」という名の下に進んできたこの現代日本の社会変化は、ある意味では、特定の人びとの「欲望の留め金 (=安全装置)」を外し、他方では、そこから生まれる軋みに苦しむ人びとの暴発を防ぐための「管理強化」をもたらしている。「規制緩和と管理強化」というこの奇妙な組み合わせの正当化が、この現代日本社会のあちこちに棲息するようになっている。

人為的な境界線が人びとを「勝ち組」と「負け組」に分ち、負け組になりたくなければ、「力」を身につけた資格を取ることであるというのが、ある種の脅しのような呪文として語られるようになったのは、歴史上繰り返される「境界線の政治学」¹の常である。男性/女性の区別を始め、自立/依存、正規/非正規、正統/異端、専門/素人、健常/異常などなど、この類の区分には、区分線を引く側が区分されたものに意味を付与し、自らを価値化あるいは正当化する境界線メカニズムの例であるとも言える。アンリ・ルフェーブル言うところの、空間を政治化し、そこにある差別的なものを排除し、ある特定の均質化へ人びとを誘導する「生政治」そのもののメカニズムが見えてくる²。

しかも、これらの境界線は社会の表層だけではなく、私たちの意識の下層に棲みつき内面化され、パターン化された文化の領域にも及んでいるのではないかと懸念される。つまり、区分者によって付与された意味を、区分された側が内面化(内面で受容する)するよう誘導する仕組みとセットになっている。例えば、正規労働と同一労働を行っているのに、非正規労働と呼ばれる側は、その「非正規」という名の故に、あたかも自身を「非正規」な存在であって、社会的にマイナーな存在として権利を有しないものであると自身を卑下してしまう可能性に襲われる。アマル

ティア・センが喝破したエンタイトルメント（自己命名権）の他者による剥奪が³、この日本社会においても吹き荒れている。

リーマン・ショック以来、この「規制緩和」（新自由主義＝ネオリベ）方式に大きな破たんが生じ、オバマ現象とも言えるような、大きな揺り戻しの時代を私たちは迎えようとしている。自明の前提であるような顔をした金融工学的な成功方程式がその神通力を失おうとしている今、私たちはこれまでのような短期的な利益の積分ではなく、長期的な遠くへの目線を必要としている時代を迎えるという予感を持つ。目先の利益に汲々とする日々のその先に、如何なる未来を描くことができるのか知らされぬまま、青年たちは未来にそれほどの期待を持たぬことで現在という時間に耐えようとしているかに見える。自分たちの未来は、その先行する世代の姿を見れば予想できる。50～60歳に自殺者のピークを持つ、日本の姿に如何なる未来を想像すればよいのか、私たちは青年たちに答えを示すことができるだろうか。

本稿は、この20年ほどの社会変化を捉えるための試みである。社会福祉、経済、教育、治療、情報科学、経営など、人びとの「ふくし」に関わる様々な領域において、その自明の前提にいかなる変化が生まれているのか、私たちの社会にいかなる変動が起きているのかを検証する起点としたい。それは、私たちが如何なる未来を生み出すかというあるべき「ふくし」を問う試みの始まりである。すなわち、本稿は、20世紀末から始まった日本社会のネオリベ化についての考察と、さらにそれが日本の福祉社会の状況（とりわけ、より現場のなかにいるソーシャルワーカーに対して）に何をもたらしたかについての再検討である。

さて、1989年のベルリンの壁崩壊に象徴される東西冷戦の崩壊は、日本社会においてもその55年体制と呼ばれる戦後日本社会の政治的基本構造に大きなインパクトを与えた。与党に対する対抗勢力として議会を二分していた日本社会党は、日本最大の労働組合の連合体を基盤とする野党第一党であったが、1996年に解党し、消滅した⁴。この頃を境に、日本社会は対抗勢力という批判の軸を急激に喪い、成功の船に乗り遅れるなという社会へ大きく舵を切った。それは崩壊する国家から逃げ出す難民船に乗り込もうとする人びとの群れと、それをせせら笑う既に乗船していた人びとの間に社会の亀裂が入るものであったとも言えるだろう。

しかし、難民船と異なるのは、社員の首切りが次々に断行され、乗船していた人びとの選別が始まり、下船させられる者が続出したことである。これはリストラという名前で行われたが、その原義であるリストラクチャリング（再構造化）とは、趣を異にする選別的な首切りであった。それまでの終身雇用制の放棄が正当化され、組織の意向に沿わない者は切り捨てられることが常態化した。組織から、「能力の無いもの」と判定されると、仕事に就くこともできないし、職場に留まることもできないという原則が、社会全体に広まっていった。組織を批判する者、組織に歯向かう者、寄与の低い者と組織や企業が名指せば、従来の仕事が剥奪され、離職を強いられることになった。雇用の側は極めて大きな自由を手に入れた。それまでの労働権は影を潜め、「能力なき者、やる気のない者は去れ！」という掛け声が響いた。「会社や組織から解職される」ことは、社会において「無能力・無気力の烙印」を押されることを意味した。

そして、さらに、財務省の強固な支援を受け続けてきた金融企業（銀行や証券会社）のいくつかの大企業が倒産することで、この原則は日本の社会全体に根付き説得に成功したように見える。すなわち、会社や組織自身の生き残りが掛っているという、一企業内部のリストラクチャリングから、社会全体のリストラクチャリングへと事態は大きく動いた。そこに現れたのは、なりふり構わぬ生き残りの肯定である。すなわち、“生き残るためには何をしても許される”という 雰囲気蔓延である。ある意味で、戦争反対の声が潜まるような沈黙が社会に広がる。非常事態の中で、生き残りをかけているが故に、排除をする側に正当性があり、「生き残りに役立つ」と看做されて排除される側にこそ落ち度があるという排除の肯定という構図が蔓延した。

本稿では、この二十年余りの間に勢力を増してきた、それまでの社会的規範 (social codes and norms) を廃棄し、既存の社会構造と社会関係を解体し、目的の実現のために手段を選ばない行動原理パターンを指してネオリベ (Neo-Libe in short) と呼ぶことにする。これはネオリベリズムという経済・財政上の概念にとどまらない広めの概念として使うことを意味している。“国家あつての国民”ならぬ、また“社会あつての市民”ならぬ、“会社・組織・制度あつての社員・構成員”という原理が、“非常時・戦時体制”を社会の常態とする中で登場したことを意味するであろう。いわば、“危機”を通じて、権力は社会や歴史的合意からの規制 (code) から、自由に動き回るコードレス (cord-less) な存在となったのである。

1. ネオリベ社会

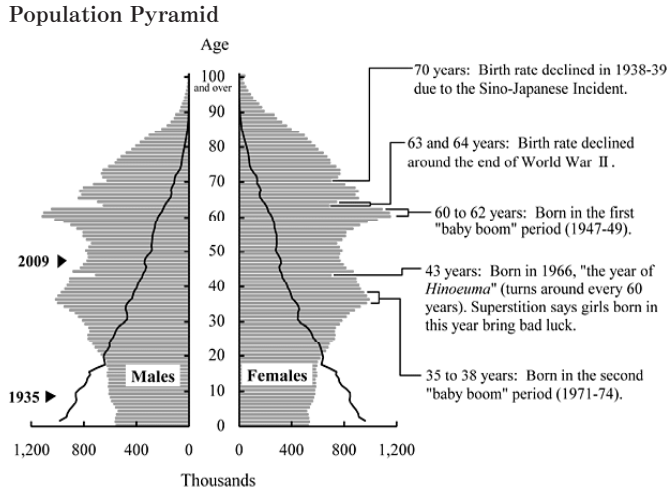
社会の様々なところで、この船に乗り遅れるか、乗ることもできなかつた、乗せてもらえなかつた人びとの排除が深刻さを増していった。ここに、こうした状況を示唆するいくつかの統計データを紹介しよう。ネオリベ化社会に何が起きているのか、その軌みのデータである。

さて、その前提となる日本社会の基本的な枠組みの中で、第二次大戦後の日本社会の人口構造上の特質をとりあえず2点指摘した上で、その軌みを駆け足で概観することにしたい。

1-1 少子高齢化と大都市への人口集中

日本社会の根幹を揺るがしているのは、第1に、急速な少子高齢化という人口構成の深刻な変化である。図1-1は、日本の人口ピラミッドとその変化である。そして、図1-2は、人口の急激な大都市（東京、横浜など首都圏、名古屋、大阪など）への極端な集中である。そして中山間地域 (deep mountainous areas) では、多くの集落が消え始めている。かつて1960年頃に、人口の7割が住んでいた日本社会の農村では、長男あるいは長女が農地を相続し、他の子どもたちは全国の大都市部へ職を求めて移動した。それから三世代後の現在、農村には2割ほどの人びとが住んでいるにすぎない。農地を引き継いでいるのは、この第一世代であるが、次の第二世代も第三世代も多くは農業以外の産業に就いている。2008年度において後継者として農業に就業した青年は日本全体で、15～19歳は600人、20～39歳は7,720人であり、40～59歳14,600人、60

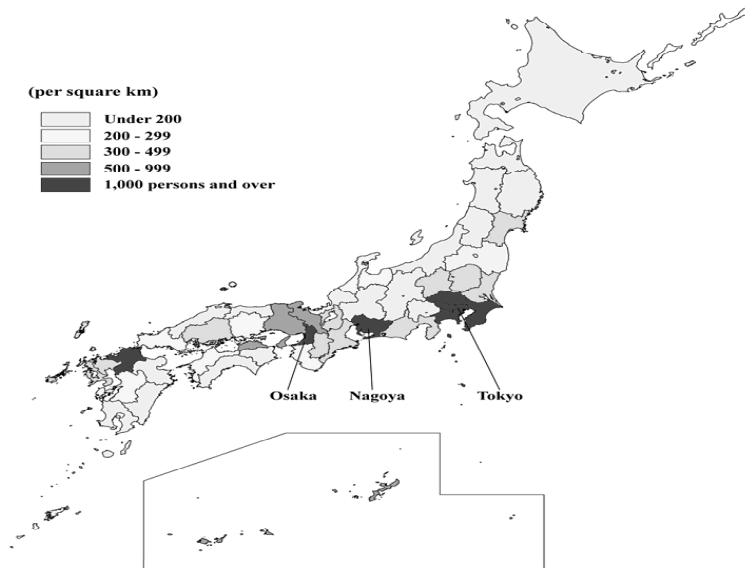
図 1 - 1 日本の人口構造の変化



Source : Statistics Bureau, MIC.

図 1 - 2 日本におけるの人口の大都市集中

Population Density by Prefecture (2005)



Source : Statistics Bureau, MIC.

歳以上 34,730 人という壮老年層の新規就農者と比較して、また 2008 年度の日本の総労働人口 (15~65 歳人口) 1 億 1 千万人に比してもその小ささがわかる。農村から大量の人口が流出したのである。

しかし、その大量の人口がまんべんなく大都会の町々に流入したのではないことが、東京の副都心である新宿区の町別高齢化率を見るとわかる。65 歳以上人口がわずか 3% である町もあれば、戦争直後に巨大なニュータウンとして生まれた都営住宅地域の町では、高齢化率は 48% である

表 1 - 1 新宿区町別高齢化率

| 町 丁 | 人 口 | 65 歳以上人口率 | 15 歳未満人口率 |
|-------------------------------|---------|-----------|-----------|
| 四谷 1 丁目 | 476 | 30% | 8% |
| 四谷 4 丁目 | 2,922 | 18% | 9% |
| 本塩町 | 386 | 29% | 6% |
| 霞ヶ丘町 | 428 | 52% | 4% |
| 大京町 | 2,820 | 20% | 8% |
| 新宿 1 丁目 | 3,499 | 20% | 5% |
| 新宿 4 丁目 | 303 | 40% | 1% |
| 市谷本村町 | 2,476 | 4% | 10% |
| 市谷加賀町 1 丁目 | 496 | 3% | 20% |
| 市谷長延寺町 | 169 | 46% | 2% |
| 神楽坂 1 丁目 | 37 | 43% | 5% |
| 東五軒町 | 1,552 | 10% | 13% |
| 矢来町 | 3,998 | 19% | 12% |
| 早稲田南町 | 820 | 30% | 7% |
| 戸山 2 丁目 | 5,878 | 45% | 6% |
| 百人町 4 丁目 | 1,065 | 45% | 7% |
| 下落合 3 丁目 | 4,029 | 21% | 9% |
| そのほか 135 町丁がある。以下はその合計と平均である。 | | | |
| 合計総人口 | 283,819 | 21% | 9% |

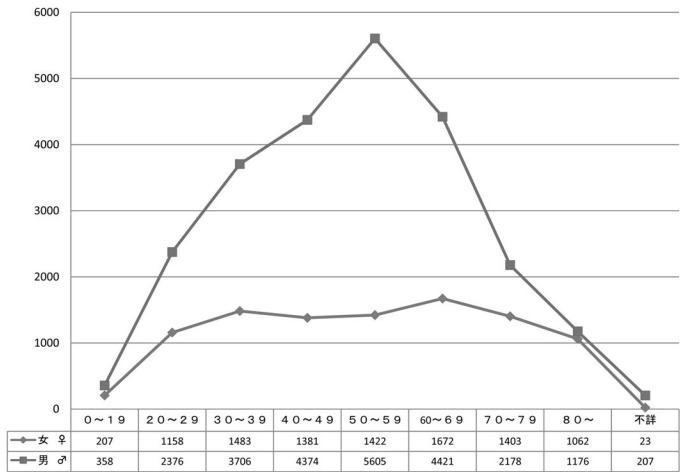
(2011 年 1 月新宿区統計資料より筆者作成)

(表 1 - 1 : 2011 年 1 月新宿区統計). 東京のセンターである新宿に生まれ育った筆者の場合, 小学校 6 年生の同級生 64 人のうち, 親たちの多くは今もそこに住んでいるが, その子ども世代で, 今も新宿の同じ町に暮らすのは, 私を入れて, わずか 3 人である. 都会においても田舎においても, 人びとは職のある場所へと移動していることになる. 町に人が暮らしているのではなく, 若年人口を中心に人びとは職と住まいのあるところへ大きく流動し, 中高齢者を中心に流動性は減少しているのである. 大都市では, 多くの new-comers とわずかの永住者によって町は構成されており, 地方では老いた住民 inhabitants がさらに年老いた親たちの世話をしている.

そして, より深刻なのは, かつて農村から移り住んできた若い世代の家族向けに, 大都市郊外各地に作られた巨大な近代的ニュータウンは, 子どもたちが成長し職のある場所へと移動した後で, 今や, 彼ら年老いた親たちだけの過疎の町になってしまったことだ. 縮小都市, 縮小地域を各地に生んでなお, スプロール型の成長開発は続く. 多様な世代が集い, 多彩な人びとが暮らす地域ではなく, 年齢や所得層で均一化された地域が, 若返ることなく朽ちていく.

この少子高齢化と大都市への一極集中と偏在化を背景に, 日本社会はネオリベ化社会へと大きく舵を切った.

表 2 - 1 日本の自殺者統計 (2009 年)



【平成 21 年版】警察白書より筆者作成

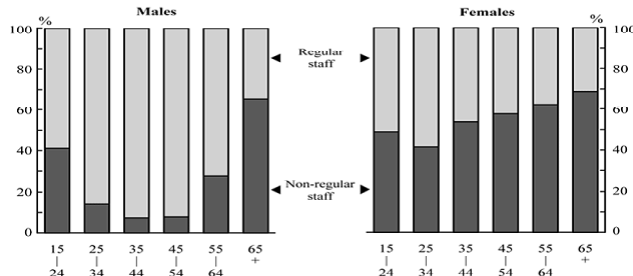
表 2 - 2 男女別正規・非正規雇用者数

Employment by Employment Pattern (2009)

(Thousands)

| | Employees ¹⁾ | Regular staff | Percentage | Non-regular staff | Percentage |
|---------|-------------------------|---------------|------------|-------------------|------------|
| Total | 51,020 | 33,800 | 66.3 | 17,210 | 33.7 |
| Males | 28,600 | 23,340 | 81.6 | 5,270 | 18.4 |
| Females | 22,420 | 10,460 | 46.7 | 11,960 | 53.3 |

Employment Pattern by Sex and Age (2009)



Source : Statistics Bureau, MIC.

1 - 2 ネオリベ化社会の軋み

issue 1. 自殺者統計 (表 2 - 1・参照)

1997 年から毎年 3 万人を越える自殺者を数える。その自殺者の変動を世界各国と比較するならば、それ以前と比べ日本が極めて大きく増加した。それを男女別年齢別に見るなら、40 歳以上の男性で急激に増加していることが分かる。しかし、いずれにしても 50 歳代にそのピークを持つことが大きな特徴である。そして、男性よりも低いとみられる女性たちの自殺者数も、世界の女性自殺者統計からすれば世界第 4 位 (男性は第 10 位) と高いこともわかる。なぜ、大人たちは死に急いでいるのか。

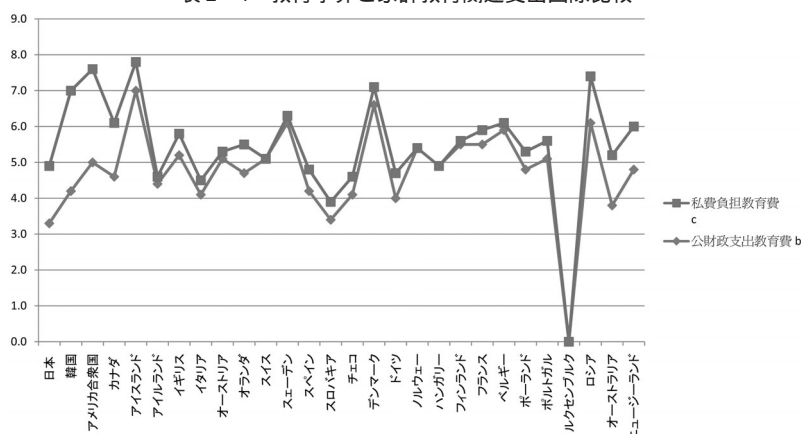
表 2 - 3 未婚独身者割合 性別生涯未婚率及び初婚年齢 (SMAM) : 1920 ~ 2000 年

| 年次 | 1920 | 1925 | 1930 | 1935 | 1940 | 1950 | 1955 | 1960 | 1965 | 1970 | 1975 | 1980 | 1985 | 1990 | 1995 | 2000 | |
|----|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 男 | 生涯未婚率 (%) | 2.17 | 1.72 | 1.68 | 1.65 | 1.75 | 1.46 | 1.18 | 1.26 | 1.50 | 1.70 | 2.12 | 2.60 | 3.89 | 5.57 | 8.99 | 12.57 |
| | 初婚年齢 (歳) | 25.02 | 25.09 | 25.77 | 26.38 | 27.19 | 26.21 | 27.04 | 27.44 | 27.42 | 27.47 | 27.65 | 28.67 | 29.57 | 30.35 | 30.68 | 30.81 |
| 女 | 生涯未婚率 (%) | 1.80 | 1.61 | 1.48 | 1.44 | 1.47 | 1.35 | 1.46 | 1.87 | 2.52 | 3.33 | 4.32 | 4.45 | 4.32 | 5.10 | 5.82 | |
| | 初婚年齢 (歳) | 21.16 | 21.18 | 21.83 | 22.51 | 23.33 | 23.60 | 24.68 | 24.96 | 24.82 | 24.65 | 24.48 | 25.11 | 25.84 | 26.87 | 27.69 | 28.58 |

総務省統計局『国勢調査報告』により算出。SMAM (Single mean age at marriage) は、静態統計の年齢別未婚率から計算する結婚年齢であり、次式により計算する。 $SMAM = (Cx - 50 \cdot S) / (1 - S)$ 。ただし、Cx は年齢別未婚率、S は生涯未婚率である。生涯未婚率は、45 ~ 49 歳と 50 ~ 54 歳未婚率の平均値であり、50 歳時の未婚率を示す。

社会保障人口問題研究所 www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Data/Popular2004/06-23.xls - 2004-04-30 より

表 2 - 4 教育予算と家計教育関連支出国際比較



(OECD : Education at a Glance B2-1 より筆者作成)

issue 2. 正規・非正規労働者数 (表 2 - 2・参照)

正規雇用の減少と非正規雇用の増大がこの 20 年間を特徴づける。同一労働格差賃金を特色とする安価な労働力として非正規雇用の割合は年々高まっている。1990 年には 20%であった非正規雇用の割合は、20 年後の現在は、およそ 33.7%へと増加した (2009 年総務省統計局)。男女別年齢別で見れば、女性と高齢者、そして若年者の割合が高いことが特徴である。

issue 3. 未婚独身者割合 (表 2 - 3・参照)

上記の傾向と関連して、未婚独身者の割合は、若い世代の男性に著しく、高度成長時代から始まったこの傾向は、この 20 年間で高齢者層においても著しい増加を見せている。少子高齢化の要因として、若い世代が未婚のまま、子どもを持つことなく独身を続ける傾向が強まっていることが窺える。1980 年以降の急激な独身化の進行が特徴である。

issue 4. 教育予算と家計教育関連支出 (表 2 - 4・参照)

日本の学校教育関連支出を公的支出と家計支出 (私費負担) の二つを GDP から見た比率資料を紹介しよう。2010 年版 OECD 資料にあるこの表を見てわかることは、先進国 (世界 28 カ国) の中で、公的支出が最も低い数値を日本は示している。そして家計支出でいえば、韓国、アメリカに次いで高い方から 3 番目に位置している、という点である。教育はその成果は個人に属すが故に個別の家計負担でまかなうものであり、社会的な負担比率が低いことを当然とするのが日本の特徴として浮かび上がってくる。文部科学省はそのことを政府内部で指摘するが、この傾向は変化していない。

以上の 4 つの資料を、日本社会の軋みとして紹介した上で、その先へ進んでみたい。

2. ネオリベ化社会の諸原理

グローバリゼーションという“経済戦争”下であって、ネオリベ社会はいくつかの原則に従うことが必要であると繰り返し、それらの常套句とも言うべきキーワードを使いながら、その諸原則を人びとに教え込んだ。この 20 年ばかり (特にこの 10 年) の間に急速に社会の中に広がった現象を捉え、次に、それらの諸原則を示すキーワードが作りだす構造を浮かび上がらせることで、ネオリベ社会に迫ることがこの章の課題である。

2-1 ネオリベ化した社会特有の諸特徴について

ネオリベ化社会の到来は、まずグローバリゼーションに対応するための規制緩和という掛け言葉とともにやってきた。規制緩和は、それまで政府が有していた規制機能を停止し、経済諸活動の主体である企業活動のじゃまをしないという原則である。この言葉が使われたのは、1984 年の中曽根政権からであった。25 兆円の赤字を抱えていた国鉄の民営化を行うと同時に、都市再開発を促進する建築規制撤廃政策をとった。これは旧市街地を中心に広がる建築規制 (高度や容積率) を大幅に緩和し、公有地を民間に売却し、民間の都市再開発プロジェクトを進めるという内需拡大のための経済政策であった。低層住宅地は高層ビジネスビルに建て替えられ、都心地区の人口は 20% 余り減少した。都市の乱開発を防ぐ安全装置 (safety catch) を外すことで、これ以後、日本経済は不動産バブルの時代に入った。2000 年までに所得税改定により累進課税率の大幅引き下げ、法人税の引き下げなどが行われたが、それらは 21 世紀に始まる本格的なネオリベ政策の前段階であった。

同じ規制緩和という言葉が使われたが、小泉政権から始まった規制撤廃 (政府はこれを“規制の緩和”と呼んだ) とは、それ以前の規制緩和とは大きく異なっていた。

第 1 に、国営企業群 (市場を独占していた郵便、電話、塩、たばこなど公営企業体) の民営化による市場全面開放、国立大学など高等教育機関の独立行政法人化や政府が作っていた特殊法人の独立行政法人化などの公営事業群の解体再編である。それまで、日本の労働組合運動の大きな

柱となっていた公務員組合の弱体化攻勢の柱ともなった。

第2には、民間企業に対して規制という名で行ってきた保護行政の撤廃として、金融業界への規制緩和による護送船団方式の放棄がある。

第3には、労働雇用のあり方を根幹から変える労働派遣法の改訂である。この法律によって、正規雇用つまり、労働組合加盟権を有する被雇用者の増加を必要としない雇用関係の創出がスタートした。退職金やボーナス、社会保険料を払う必要のない、また業務変更を行う必要のない（＝給与額の固定化）短期労働者の採用を可能にしたのである。先の issue 3 で見た、非正規雇用と正規雇用の比較を思い出してほしい。好きな時に好きなだけ雇い入れ、好きな時に好きなだけ雇用契約を取り消すことができる雇用関係が正式に採用された。アウトソーシングと呼ばれる、欲しい物だけ手に入れ、要らないものは購入しない手法として、公共団体も企業もこの雇用関係を増やしてきた。

これらの一連の“規制緩和”と呼ばれる政策群とこれを正当化する原理がここで検討するネオリベである。このネオリベの時代において、我々が直面しているのはなんであろうか。以下に、「忙しさ」、「効率万能イズムの蔓延」、「無駄の排除とマニュアル化社会」などというネオリベを端的に表すいくつかの観点からその検討に入ろう。

2-2 Busy-ness : 忙しさ

このネオリベ化した社会にあって、我々が感じるのは、ますます増加する忙しさである。かつて必要だったのは、年間計画と季節毎の計画であり、報告書は年1回から4回であったものが、月毎の計画・報告になり、さらに週毎の計画・報告になり、それが毎日の報告・計画になった。それは、年間黒字ではなく、毎月の黒字、毎週の黒字、毎日の黒字を実現すれば一年は確実に黒字となるという、頻繁で小刻みなチェックを導入する強迫神経症のような経営手法の登場である。失敗・遅延は許されないという教育が初等教育の段階から繰り返し行われた。

企業だけでなく、小中高校の教師たちも、毎日、次の日の指導計画書とその日の報告書を校長に提出することが義務付けられ、教員会議の場は議論や検討する場ではなく校長の指示と報告を聞くだけの場となる。東京の都立高校では、教育委員会から、教員会議の場を議論の場とすることを禁ずる通達が出され、これに従わなかった（＝教員会議で議論をし、挙手採決を行ったこと）一人の校長がこれに異議を唱えたことが事件として報道された⁵。すべての事項は校長が決定するものであり、教員はその指示に従うべきものであるというのがその通達の趣旨であった。教員だけでなく、議論の場は生徒たちの教室からも消えた。小中高において、とりわけルールに関する議論はなく、ルールは学校から与えられるものという傾向が強まっている。大学の場で、学生たちが自分の意見を明らかにしない（躊躇する、あるいは回避する）傾向が強まっていることとの相関性が懸念される。

PDCA サイクルと呼ばれる、Plan・Do・Check・Action・Cycle というデミング・ホイール (Deming Wheel) が蔓延し、チェック期間の短縮化（小刻みなチェック）が社会の様々な局面

に多用されるようになった。最上位に、青写真（計画）があり、その当初プランの実行が重視され、チェックは本来であるなら、計画そのものの可否を問うこともその中に入るものであるが、流行りのPDCAサイクルにおいてはこの視点が外され、既成の計画案の遂行に重点が置かれた。「意志したものの実現、目的の完遂」が至高の課題となり、それを阻害する存在は「邪魔」「ごみ」「不要物」と称され、排除されることになる。予め設定された目標を是が非でも実現しようとする、形を変えた計画経済の蔓延である。特徴は、計画そのものの絶対化である⁶。

2-3 効率万能イズムの蔓延

あらゆる場面で効率性の追求が始まった。投入された投資当たりの成果、投入された時間当たりの産出量（input-output efficiency by money and/or time）が問われるようになった。速さと量と質が、最大限になるようにマネージされるようになった。コストカット・タイムカットという“無駄”の排除は数値でモニターされる。The Lowest Expenditure and the Highest Profitというシンプルな原則が、正規雇用の半分以下の給与で働く非正規雇用の増大、あるいは途上国への工場移転という判りやすいやりかたへ一挙に動かした。効率はずべて数字に表わされる。数値で指標化されるものでコントロールされる。数値化されないものは指標には使われない。この効率指標によって人びとは自分の“能力”を示さなければならない。示せなければ、効率の妨げとなり、職を失うことになる。たとえその事業自体が市場性（marketability）のない事業であったとしても、その事業の成果を上げられなかったのは、計画立案者や事業を命じた者でなく、事業を実施していた者の責任になる。計画の絶対化と対をなす、実行者への成果主義、自己責任論転嫁の隆盛である。

2-4 無駄の排除とマニュアル化社会

無駄を省く、コスト削減の手法として動作・手順の簡略化が進んだが、対人サービス（personal services）業界では、規格化された接客メニューが広がり、初めから最後まで、誰が来ても同じ受け答えで済むような単純化が進んだ。従業員の裁量に接客の質を委ねることなく、マニュアル化された接客手順こそがサービスの質そのものになる。標準化という名前で使われることの多いこの無駄ゼロ方式は、最小の支出で最高の利益を！を合言葉に社会全体に広がってきた。

マクドナルドなどのチェーン店で、ハンバーガーを注文する時を思い出してほしい。時間当たりの接客数という効率化が進むためには、お客は道を尋ねても味を尋ねてもいけない、ましてやアルバイトをしている友人に個人的に話しかけることもできない。そこでは、お客はマニュアルに書いてあるお客という役を演じなければならない。そうでないと接客効率が下がってしまうからである。このマクドナルド化という現象は、お客は個人として店を訪ねてはならないことを意味し、店の従業員から聞かれたことにだけ、答えることが必要であり、それ以外を演じてはいけないのである。シミュレーション化されたマニュアル以外の行動や会話を従業員だけでなく、お客が発することは、施設や事業のマネジメントの都合にとって“問題行動”と呼ばれるものになる。

工場の生産効率は、時間当たり何台の自動車を生産できるかで測られる。同じように、食堂の営業効率は、席数の回転率を上げること、つまり早く食べ終わって、次のお客に席に着いてもらうことがカギになる。お客の回転率がすべてとなり、ランチを食べる機械として速やかに食べ終わることが求められてしまう。ゆっくり食事をし、会話を楽しむ余裕はない。してもらっては困ることになる。それでも利益が上がらなければ、他方で、コンピューターに直結したレジ記録から、ランチ数に見合ったパート労働時間が割り出され、それに見合う人件費削減が目標値として設定される。accountability の countability 化である。その路線を歩むなら、食堂の目的は、座席回転率の向上を通じた効率的経営と最小限の人件費で賄われる「無駄のない経営」を目指し始めることになる。

大学では、資格試験などに入らない科目に対して、試験合格に関係ない科目を学ぶことは、無駄であるということから、学生たちは「裏番組」と呼び始めた。大学の教育カリキュラムの改訂を学生たちはこのように受け止めたのである。歴史は学ぶ必要のない科目 (unnecessary subject) であると。不必要なものは省くという学生たちのリニアな行動は、ある意味、無駄のないキャリアデザインにとって極めて合理的であると理解される。学生の集まらない科目は廃止されるか、教員が捨てられる。市場志向 (マーケット・オリエンテッド) とは、我儘を許さない標語となる。ここで注意しておきたいのは、これらは、そのことを大学も学生も目指して行われたのではないにもかかわらず、こうした事態を結果したことの意味をここでは指摘していることである。すなわち、効率を下げるもの = 無駄なものという図式は、「無駄」と看做されたものを直接排除するシンプルな、リニア = 直線系の社会を目指し始めることである。お客に注文ボタンを押されることの少ない自動販売機の商品は、販売リストから外されるのである。ニーズという名の WANT の優先である。

2-5 規制緩和そして自己責任論 自己責任と能力・実力社会と「勝ち組・負け組」伝説

企業や組織が必要とするものは明確であり、したがって賃金も明確である。雇用されている側は、組織や企業から期待されていないものを持っている必要はない。言われたものを提供することだけが望まれる。これが企業・組織の規制緩和である。

そして、他方において、人びとの自己責任論が強調され、企業や組織に雇われないということは、期待されている能力を本人が持っていないという言説が広がった。この、正規雇用されない人間は能力がないという解説は、人びとを脅し始める。能力評価を行う社会にあって、教育は自己責任であるという認識が広がり、学生たちは就職活動を有利にするために様々な資格を取ろうとする。卒業という最大の資格以外に、何らかの資格を手にすることで就職活動を有利にしたいという思惑が働く。授業単位を取れば自動的に取れる資格でなく、ハードルを越える必要のある資格試験に合格することが正規雇用に採用される条件として掲げられるなら、この傾向は脅しては現実のものとなる。資格関連科目あるいは資格試験対応の講義取得が増加し、それらに直接関係しない科目群、教養科目群は最低限に減らされていくことは学生の無駄排除思考と重なっ

た時、現実のものとなる。

教育が、社会の次の世代を育てていく社会自身の事業であることをやめ、会社や組織が必要とする個別的な能力育成の場となること、逆に言えば、会社や組織が必要とするものだけを提供することに教育が専念するなら、既存の社会は新たな可能性を育む機会を失うことになる。あるいは、社会は欲しいものだけを外部から調達する外部資源依存型の社会となる。必要なものは買えば良いのである。しかし、何を欲しいものとしているかから、当該社会が（あるいは会社が）いかほどの代物なのかが判るが、そのことは問われなくなる。見えるもの、判りやすいものが求められることになる。

自分自身が、相手の買い物リストに入らない者、つまり良い就職先を得られないことは、その人間の無能さを表すと理解する学生たちは、ホームレスや生活保護受給者、精神的障害者や身体障害者に対して非寛容である。『働いていない者＝雇用されていない者や住民票を持たない者は、国民ではないと思う』と述べる学生たちである（それ故、『学生である自分はまだ子どもであり、国民ではないと思う』と語る）。それは、あたかも、非寛容であることによって、自分自身はその一群に属するものではないことを証明しようとするかのようにである。「勝ち組」と「負け組」という分類が人びとを脅えさせ、一度負けたなら「負け組」という烙印が押されること、それが自己責任であると看做される社会が現れてきた。

他方で、必要なものだけを消費することを求めている間に、「社会から必要とされていない」と看做され、社会から捨てられ、そして自分自身からも捨てられる人びとが多くあらわれてきた。「要らぬもの」（あるいはハンナ・アーレントが言う「余計者」）として、そのように看做された人びとを捨てた時、社会は浄化され、単一の特徴を持ち、カウントされる量としての人びとだけで構成されていくことになる。その時、社会はいかなる意味において社会たり得るのであろうか。多様性こそ、多声性こそ社会の豊かな原資ではなかったのか。

2-6 孤独

写真1は、深夜の車中風景である。人びとは携帯電話を一齐に操作している。まるで、一人でもかかわらず、実は孤独ではなくて、誰かと繋がっているのだということを周囲の人びとに示そうとしているかのようである。

次の写真2は、東京の近代的なニュータウンの1つ、光が丘である。この町にはすべてがそろっている。中心にある地下鉄の駅のまわりには、病院、学校、区役所の支所、社会福祉協議会、自治会、ショッピングセンター、レストラン街や警察などがある。福祉事務所の真ん前に立つ、この30階建ての建物は、ロックキーで守られた集合住宅である。その28階の一室、ワンルームで月の家賃12万6千円のこの部屋で、72歳の男性の腐敗した遺体が発見された。配達された新聞の日付から、死後3週間と推測された。3年に一回、区役所は独居老人の調査をしていたが、この老人は1年半前に入居したため、福祉事務所にはデータは存在していなかった。死亡してもすぐに発見できるように、福祉事務所は週に一回、独居老人宅の巡回を始めた。人びとが捉えるこ

写真1 電車車内風景 全員が携帯を見ている



写真2 光が丘団地

高層住宅



ドアの前で



の出来事の本質は、独居者の孤独な生ではなく、死が発見されなかったことであるかのようである。

死んではみたものの、誰もその遺骨を取りに来ない無縁死者といわれる人びとの遺骨が、2009年だけでも、3万2千余箱、地方自治体の棚に眠った。死んだことすら気にされていない人びと、いや、生きていることすら気にされていない人びとの死が、地域福祉の岩の棚に眠っているのである。

2-7 目的は手段を正当化するか (The End Justifies the Means)

目的に向かって、最小限の支出で到達するリニアな思考は、直線的な進行を妨げるものを邪魔、障害、無駄として排除する。効率が自己目的と化した時、我々はこうした障害物を排除することこそ正当であるとみなしやすい。この思考自体は、西欧に追いつき追い越せというキャッチアップ

ブを肯定化し続けた日本社会にあって、違和感のない思考方法である。それは、キャッチアップという成果のためにすべてが正当化されるという政府や企業の右からのネオリベ思考のパターンであったり、反対派や批判派を粛清し排除することを繰り返してきた左からのネオリベ思考のパターンであったりする。規制という安全装置を外すことで、自由に革命を起こすことを覚えたネオリベ社会は、ある意味で、日本においては東西冷戦終了の落とし児であり、左右両翼にとって社会的倫理観なき剥き出しの成長競争の継続である。効率化と成果という目的のために、社会的倫理という社会の安全装置を外したところに、日本のネオリベの力とそれがやがて我々の社会にもたらす限界が見えてくる。

2-8 下品で粗野な社会のなかで

冷戦終了後始まったこの20年の変化は、社会主義国家群と資本主義国家群の対立の停止、そして資本主義国家群の勝利のように、見える。しかし、それは産業革命以後に訪れた近代・現代というものの剥き出しの露出として理解することが可能であるように見える。当初の期待利益を実現するための詳細で頻繁なチェックと、それを可能にした（エンパワメントした）IT革命、そして膨大な管理機構は、新たな計画経済の資本主義的实践として見えてくる。人びとは証を見せると言い続け、そして言われ続け、証が無いものは容赦なく排除される。悪いのは「排除される側」にあり、排除する側には理由があるという正当化が満ち始める。労働生産性が落ちた人間はこのコミュニティから出て行けという論理が大手を振って歩き始める所に、組織は生まれるが、社会は生まれない。

ジグムント・バウマンがいみじくも述べているように⁷、我々はソリッドな社会からリキッド化した社会へとその転移してきていることに気がつく。そしてその先に、「社会は生まれない」という現実を目にしている。そして、そうした現状のなかで、私たちの進むべき道はなにか、さらに、ソーシャルワークを通じて、その役割を構想することが、本稿の最も重要な課題である。

今日を生きることが、今日を生きることにならなくならず、その先の展望を見出し得ないとき、私たちはもぐら叩きのような個別問題の解決に追われ続け、足早な自己崩壊への道を歩いていくのか、それとも希望を失わず日々を貯めていくのかの瀬戸際にあることに、思いを馳せるべき事態に現在があることを、私たちは覚悟する必要がある。私たちは深くこの社会を問い続けることを通じて、ソーシャルワークの存在理由（業界の存在理由ではなく）、あるいはソーシャルワーカーとして働く人びとの存在意義を、再考しなければならない。

3. リキッド化社会から気化社会（=無抵抗・無批判社会）へ

3-1 リキッド化社会におけるソーシャルワーカーの限界

リキッドモダニティにおいて、ソリッドモダニティの申し子ともいべきソーシャルワーカーは、すでに、その役目を終えているのではないか。また、そこに、過度の期待をすること、ある

いは、新たな役割を付加することは、やや幻想ではないか。

理由は、実に明確である。社会が、リキッド化するということは、「勝ち組」であろうが、「負け組」であろうが、勝ち負けに関係なく、すべての人間が、社会から離脱することを意味している。すなわち、退屈で、不安で、孤立した日常生活は、すでに「負け組」の専売特許ではなくなっている。もちろん、「勝ち組」は、財力にものをいわせて、高級スポーツクラブの会員となり、週に数度はプールで健康維持のために泳ぎ、年に数回は、海外のリゾートホテルのプールサイドで、のんびりした時間を過ごすであろう。しかし、だからといって、彼ら「勝ち組」が、退屈で、不安で、孤立した日常から解放されているわけではない。彼らが手にしているのは、少々贅沢な時間であり、それは、「負け組」が、郊外のショッピングモールでウインドウショッピングを楽しむ贅沢と如何ほどの違いもない。さらに、どこへ行っても、マクドナルドでハンバーガーを購入する時と同じように、私たちはただ“動かされている存在”に過ぎない。そして、両者ともに、その背後には、色を失った荒野が無限に広がっている。画一化され、均一化された社会の成れの果てでもある。

こうした状況において、現在、ソーシャルワーカーの役割を問い直すならば、彼らの守備すべき範囲は、当然、「負け組」だけにとどまるわけにはいかず、「勝ち組」まで触手を伸ばすべきである。逆に、「負け組」だけを対象とすることは、税の不公平感が生じるばかりではなく、「勝ち組」からみれば、「何故、私たちの退屈で、不安で、孤独な日常」が放置されるのか、と問われることになる。しかし、「退屈で、不安で、孤立した」、いわゆる画一化され、均一化された人びとすべてを対象として、ソーシャルワーカーが働くということは、非現実的であり、税金をいくら投入しても足りない。だからといって、ソーシャルワーカーと「負け組」とが結び付けられた狭い領域だけを問題にするならば、それは、同時に、ソーシャルワーカーの存在意義の速やかなる低下を意味するであろう。すなわち、ネオリベ化によってもたらされた社会の断層、または、社会の表面に露出する問題点だけを取り出してリキッド化した社会を読み解くことが難しいように、その困難は、ソリッドモダニティの申し子ともいうべきソーシャルワーカーが、現実に対応できない限界性を裏返しに示している。

3-2 ソーシャルワーク（「社会的活動（者）」）の本源的限界性

ソーシャルワーカーとは、「社会的活動（者）」であり、それが、ソリッドモダニティにおいて国家（福祉）と結びついたこと、すなわち、彼らが専門職化し、公務員化したことに、ソーシャルという看板を掲げながらも、彼らの社会からの離脱が始まっていたのではないか。言い換えれば、ソーシャルワークという特別な存在理由または存在意義が、特定の人間に付与された時に、ソーシャルワークの本源的な限界性が潜んでいたのではないだろうか。その時とは、それまでどこにでもいる街中の「お節介なおばさんたち」が、ある日突然、国家から、彼女たちが、それまでしていた社会的な活動に名前が与えられ、給与が発生した瞬間。あるいは、専門的知識を携えた公務員（あるいは資格を持ったソーシャルワーカー）たちが、「お節介なおばさんたち」から、

社会的な活動を奪い取った瞬間にほかならない。私たちは、障害を持って生まれた子どもたちを「福子」（人びとの心を優しいところにする子どもの意）と呼び、集落全体の女たちでこの子を見守り、時にその「世話焼き」と呼ばれる世話役を決め、そしてその子の親が死んでもなお見守り続けた「お節介なおばさんたち」こそ、住民自治の要であったという歴史を持っている。筆者がそのひとりの「世話役」を務める年配者の女性から聞き取りをしたのは、今から40年ほど前の福島県会津地方の集落であった。すでにその時、このような役割は行政の役割であるとされていたにもかかわらず、その集落にはこのことが生きていた。

もちろん、社会から離脱した原因は、ソーシャルワーカーそのものの責任ではなく、それは、時代の要請であったといえる。ソリッドモダニティでは、階層化社会が成立するなかで、どの階層にも属することができない（あるいは属することが難しい）人びとを対象として、高齢者、貧困者、障害者などの分野における専門職としてのソーシャルワーカーを生み出していくことになった。つまり、高齢者、貧困者などは、まさに家族、共同体、会社などの組織から排除され、社会の片隅に放置された人びとであり、そうした人びとをひとまとめとして行うケアの必要性と必然性は（その方法が正しいことであったのかどうかは別であるが）、ソリッドモダニティ、すなわち、「国家は福祉である（あるべき）」とする社会では、高まっていたといえる。

しかし、リキッド化した社会では、そうした専門職ソーシャルワーカーは、「勝ち組」・「負け組」に関係なく、すべての人びとが、「社会的活動」を放棄するための正当性を与える存在という面を否定することはできない。言い換えれば、ソーシャルワーカーの登場は、それまで人びとの間で曖昧だった「生産（経済）的労働」と「社会的活動」の境界線が明確に示されることをも意味するようになったのではないだろうか。そして、このことは、ソリッドからリキッドへと社会が動くことを後押し、人びとの「社会的活動」に費やされていた時間は、人びとから引き剥がされ、すべからく「消費」の時間に置き換えられることになる。分業化・現代化という名の専門職化である。

もちろん、私たちから「社会的活動」が欠落していった、あるいは引き剥がされていった原因を専門職としてのソーシャルワーカーの誕生だけに求めるわけにはいかない。むしろ、それは、私たちに正当性を与える程度の消極的な理由に過ぎないであろう。私たちは、隣人の困難に遭遇したとき、「役所に相談にいけばいい」という言い訳を何の疑いもなく言い放すことが可能になっただけである。むしろ、原因は、「生産的労働」への集中、過度な「消費」への誘いにある。そして、こうした諸原因によって、私たちの多くは、「社会的活動」に従事しない日常のなかで、社会は、必然的にリキッド化していくことになったのではないだろうか。つまり、「社会的活動」のアウトソーシングを前提に、「生産的労働」への専念という分業化の果てに、「社会的活動」から無縁な人びと（=社会）を生み出してきた。さらに、ネオリベ化は、半ば脅迫的に人びとを「生産的労働」のなかに囲い込み、そのなかで、能力・技能という基準で人びとを再評価し、もはや人びとを、無抵抗で、無批判的な人格に仕立て上げることに成功しているように見える。

3-3 「生産的労働」と人間関係

「生産的労働」、言い換えれば、「お金を得るための労働」に多くの時間を使うようになった私たちは、必然的に新たな人間関係に従わざるを得なくなっていった。それは、「お金」を中心とした社会、まさに、市場経済社会での人間関係の再構築を迫られることであり、ネオリベ的人間の創出にほかならない。そして、その人間関係とは、「恫喝」と「信用」をキーワードとした関係である。さらに、ネオリベ化によって、この2つの言葉は固く結び付けられ、「排除」という言葉が、私たちの肩の上に重く押し掛かる。すなわち、「恫喝」に従わず、「信用」されるための「何か」を持っていなければ、私たちは、「お金を得るため」の現場（あるいは組織から）から排除されることになる。そのため、私たちは、従順に身なりを整え、「生産的労働」に埋没し、自分以外の人間を「恫喝する/される」または「信用する/される」対象として位置づけることになった。

もっとも、ホームレスは、仕事（生産的労働）から、自らの意志に関係なく、むしろ、ネオリベの内規（無能な人間は不必要）に従い、解放された人びとである。そして、この事実は、「恫喝」や「信用」という人間関係からの剥落を意味する。したがって、ホームレスは、「恫喝」されることもなく、また、他者は、「信用」するための「何か」を彼らのなかに探そうともしない。しかし、依然として「生産的労働」に属する「負け組」は、長時間労働を強いられ、すなわち、「恫喝」と「信用」の関係のなかに、その1日の大半が費やされ、彼らは、残された僅かな時間で身の丈に応じた消費を楽しみ、精神的なバランスを取るのである。そして、「勝ち組」は、すなわち、「信用」されるためのさまざまな能力あるいは資金を有した層は、ときに恫喝者として振舞い、「負け組」に決して真似できない消費を楽しむことが出来る。しかし、彼らとて、いつ何処から「恫喝」される可能性、または、「信用」を失墜する危険に怯えながら、生きていかざるを得ないという点では、「負け組」と大きな違いはない。

ネオリベ的思考が支配する限り、この関係は、決してなくなることはないであろう。むしろ、この関係性を土台として、私たち人間の関係性は、絶えず、再構築されていくことになる。

もっとも、リキッド化した社会の下で、私たちには、まだ、「消費」という快樂が与えられている。少なくとも「排除」の恐怖に対して、「消費」という逃避行動が許されている。そして、「恫喝と信用」の人間関係に疲れた私たちは、やがて1人部屋にこもり、消費に埋没しつつ、明日を迎えることしかできなくなる。しかし、結果として、消費は、私たちの孤立を深めるだけで、退屈で、不安な日常を何一つ解決することに繋がらないばかりか、私たちを社会の周辺へと追いやることに直接に結びつく。追われた社会の中心を振り返ると、すでに、そこには、何もない空洞があるだけである。そして、中身を失った社会の周辺で私たちは、いつまで社会の周辺に滞留することができるのか、という新たな不安に襲われ始めている。

3-4 リキッド化した社会の先にあるもの

時間が決して止まらないように、社会も動き続けている。ソリッドモダニティからリキッドモ

ダニティへと社会が動いたように、私たちは、次なる社会の到来の必然性を受け入れなければならない。次なる社会はいかなる社会であるのか。実は、すでにリキッドモダニティの時代は終わったのではないかと予感せざるを得ない出来事が、私たちの生活空間の隅々で生じている。

私たちが、すでに片足を踏み入れている社会とは、気化社会にほかならない。溶け出した液体が、乾燥した空気に触れて、じわじわと気化していくように、私たちの社会そのものも気化されつつある。そして、この気化現象は、まずもって私たち人間から始まっている。

アパートの一室で、誰にも気づかれることなく、腐乱していく人びと。彼らの肉体は、部屋の空気へと転化していく。こうした哀れな事実を前にして、私たちが、成すべきことは何か？たとえば、隣りに住む高齢者が、助けを求めてきたら、どうするだろう。大半の人びとは、「役所に相談すれば」と言い、あるいは少し親切な人ならば、役所に電話を掛けるかもしれない。もう少し親切な人であれば、役所に自ら足を運ぶかもしれない。しかし、どの行為も、社会の周辺に自らを位置づけていることに変わりはなく、自らの行為を正当化するだけである。そして、最後の切り札として、私たちは、「素人だから、専門家に任せるのが一番」と嘯くのである。言い換えれば、私たちの大半は、社会的活動を専門職に押し付け、さらに、「忙しいから」というとどめの一言を吐いて、自らの労働と消費に明け暮れる。朝起きて、カーテンを開け、その視界の先で生活する人びとのなかから、「あなたの葬式にどれだけの人が出席するのか」と指折り数えれば、社会への関与度が分かるし、自らの死がいかなるものであるのか、大方の予想はつくであろう。まさに、今、日本のどこかで腐乱していく人びとは、私たちの明日の姿である。

しかし、私たちは、そんな明日を知りながらも、無抵抗で、無批判である。それは、まるで「恫喝」と「信用」に固められた舞台の上で、疲れ切った役者そのものである。そして、もはや、消費に浮かれることに疲れた人びとから、静かに気化していくだけの存在に過ぎない。私たちは、舞台の上で行儀よく列をなして、気化する順番を待っているだけである。無抵抗で、無批判なその行列は、ベルトコンベヤーに乗せられた廃棄物である。もちろん、その行列には「負け組」だけではなく、「勝ち組」までが並んでいる。確かに、誰もがアパートの一室で気化していくわけではない。幸運な人びとは、家族に見守られながら、死を迎えることができるかもしれない。または、財力にものをいわせ、立派な葬式を挙げることができるかもしれない。しかし、家族に見守られたとしても、または、立派な霊柩車で火葬場へ送り込まれたとしても、社会が、その死者を明確に記憶することはない。通夜や葬式では、多くの参列者がそうであるように、焼香を済ませば、足早に式場を後にして、信号待ちの間にすでに死人の記憶は遠のいてゆく。気化社会とは、人びとを記憶する力を失い、悲劇的な死であろうが、盛大な葬式で送られようが、死は気化以外のなにものでもない。

リキッドから気化へ、私たちは、今、まさに記憶できない、または、記憶すべき関係性（あるいは他者）を失いつつある新たな時代に突入している。それは、牧場の牛や馬との違いはなく、ただ、放牧された「牛」の一群、「馬」の一群、そして、ゾーエー⁸としての一群に過ぎない。

3-5 気化社会におけるソーシャルワーク（ソーシャルワーカー）の役割とは

ソリッド、リキッド、そして、気化へと進む社会。この流れの要因は、決して一つではないにしろ、やはり、人びとが「社会的活動」から回避したこと、あるいはそこから引き剥がされたことが、根本的な原因ではなかったかと考えられる。

「社会的活動」に従事する人びとがいなくなれば、社会は、その機能を低下させ、さらに、人びとは、「信頼」、「連帯」を育むべき人間関係形成の場を失うことになる。まさに、この「信頼」、「連帯」という概念は、「恫喝」と「信用」と対峙するものであり、「社会的活動」を通して初めて、私たちに内在化するものである。間違っても「生産的労働」や「消費」を通して得られることができないものである。社会にコミットしない生き方をすれば、当然、社会は、彼を記憶することはない。ただ、恫喝におののき、不安を感じる「人間」の一群の存在を記憶するだけである。

ならば、人びとが、再び、「社会的活動」に参加できるような仕組みを再構築し、人びとの間を、「信頼」と「連帯」で今一度結びつけることができれば、気化へと進む社会の流れを止め、新たな社会を構築することが可能なのだろうか。しかし、現代社会の悲劇は、「社会的活動」を営む舞台すら、ほとんど持ち合わせていないということである。もし、私たちが、「社会的活動」を行おうとすれば、それは、「恫喝」と「信用」という土台の上でしかない。その空間で、「恫喝」とか、「信用」といった概念とは、まったく異なる（むしろ真逆な）価値観を作り出すことは可能なのだろうか。人びとは、「気化すること」と「社会的活動」とを選択する場合、どちらを選択することになるのだろうか。退屈で、不安で、孤立に慣れ親しんだ人びとは、何のためらいもなく、「忙しいから」と言って、気化することを選ぶのではないだろうか。なぜならば、そのほうが、「苦痛のない」、「楽」で「便利（コンビニ）」な選択だからである。

「社会的活動」とは、まさに、人間による最大限の欲望、わがままといった煩わしいもののなかにある。さらには、「生産的労働」に慣れ親しんだ人びとからみれば、なんとも不合理極まりないものであろう。また、「生産的労働」に従事するとき、一定の能力・技術が必要なように、「社会的活動」も、当然、訓練しなければ、従事することはできない。いうまでもなく、その作業は、決して平坦ではないだろう。しかし、それでも「生産的労働」と「消費」のなかに、たとえば、僅かな隙間しか残っていないくとも、そのなかに、「社会的活動」を組み入れなければならないだろうし、社会の気化を食い止め、新たに「よき社会」を創出するための努力を惜しむわけにはいかないだろう。

それでは、私たちは、今、何をなすべきなのか。または、如何にすれば「よき社会」を実現できるものなのか。その手がかりとして、アリストテレスの「りっぱな市民はまたよき人でもあるか」という問い掛けに、そのヒントを見出したい。

アリストテレスは、『政治学』のなかで、次のように「よき人」と「りっぱな市民」を区別している⁹。

よき人のよさと、りっぱな市民のりっぱさとは、おなじひとつのもの（徳）であるの

か、それとも同じものでないのかという問題の考察がそれである。しかしとにかく、もしこの問題の答えを探さなければならぬというのなら、まず市民の徳というものをなんらかの輪郭だけでもつかまなければならない。そうすると、市民とはちょうど船員と同じようなもので、共同者の一人であるということになる。ところで船員は、めいめいできる仕事の範囲が違って、ある者は櫓をこぎ、他の者は舵を取り、もうひとりはその助け、さらに他の者はこの種の呼称を持つ他の仕事をするというようになっているが、しかしそれでも、たしかにめいめいの徳を精密に説明するとなれば、それぞれの説明はめいめいにしか当てはまらないものになるけども、しかしそのすべてに同じように当てはまる何か共通の説明もあるだろうということは明らかである。なぜなら、航海の安全が船員すべてに共通する仕事としてあるからだ。というのは、そのことを船員のめいめいが願っているからだ。それゆえ、同様にまた市民も、めいめい違っていても、みんな共同体の保全を仕事としているのである。そして国家体制こそが共同体の共同ということを作り立てているものなのである。したがって市民の徳（りっぱさ）というものは、市民国家の体制との関係できまることは必然である。だから、国家体制の種類が一つに限らない以上、りっぱな市民のりっぱさ（徳）は一つに限られず、それ自体で完結したよさ（徳）にならないことは明らかである。これに反してよき人（男）ということをわれわれがいうときは、それ自体で完結したよさ、すなわちただ一つの徳にもとづいて、そういうのである。

この一節から読み取るべき哲学的な意図は、多々あるのであろうが、「よき社会」を念頭にすれば、私たちは、次の点に注目したい。

第1に、アリストテレスが、船を例えにしてイメージした共同体（国家像）は、現代社会とは大きく異なっている。もちろん、航海の安全を現代の市民も願っているし、また、船員もそのために努力していることに違いはない。しかし、現代という海を航海するネオリベ号は、船員だけが乗っているわけではない。船には、船底から甲板までぎっしりと乗客で溢れかえっている。それも、お金を払って乗船しているのだから、船員が汗水流して働くことを当然とし、ときに、船員が甲板で風に当たりながら一服でもしているものならば、クレームを船長に平気で言いつけるような乗客も多々含まれている。もっとも、すべての乗客が、航海の安全よりも、自らの権利を大切と思っているわけではないだろうが、現代の船には、「消費者」としての乗客、それもお世辞にも品が良いとはいえないような乗客が、非常に目につく。少なくともアリストテレスが提示した「みんな共同体の保全を仕事としている」社会とは大きく異なっているし、その隔たりは、「よき社会」と現在の社会の違いでもある。さらに、現代の船の乗客は、他方において「生産的労働」にも励んでいる。もちろん、彼らは、その「生産的労働」を展開する組織において各自の役割を忠実にこなし、さらに、船賃をしっかりと納めているのだが、彼らをりっぱな市民と呼ぶことに対しては、かなり躊躇したくなる。もちろん、そうした「生産的労働」に励む人びとは、や

がて、船内に莫大の金貨を山積みすることになるかもしれない。がしかし、だからといって、財貨に溢れる船が、よき船、「よき社会」と呼ぶことはできない。

第2に、繰り返しになるが、金貨を大量に積み込んだネオリベ号では、乗客の誰もが、その分け前にありつくことはできず、いつまでも乗客であり続けることはできない。ネオリベ的な選別によって「負け組」となった人びとは、甲板に並ばされて、海に突き落とされる。アリストテレスが生きた時代では、まだ、奴隷として生きていくことが許されていたのだから、「負け組」は、まさに奴隷以下の存在ともいえるであろう。人びとをふるいにかけて、身軽になったネオリベ号は、洋上を快走する。しかし、その目的地がどこにあるのか、乗客が知ることなければ、船員も、そして、もしかしたら船長さえも知らないかもしれないが（船長が存在しているのかどうかも疑わしいのだが）、そのことは、それほど大きな問題とはならない。なぜならば、我らが船は、今まさに、洋上から消えてなくなりそうな状況だからだ。

第3に、「りっぱな市民」とは、現代的に言い換えれば、船のなかで、各自の役割分担を忠実にやり遂げることであり、そのことが、徳であり、りっぱさであるということになる。ネオリベ号にも、各自の役割を忠実にこなしているりっぱな市民を発見することは決して難しいことではない。そして、航海の安全のためにその役割を担っている船員を現代の船上に思い浮かべるとき、私たちは、公務員であるとか、または、まさにソーシャルワーカーという人びとを容易にイメージするであろう。しかし、ネオリベ的にいうならば、「りっぱな市民」とは、「勝ち組」にほかならない。「勝ち組」は、自らが乗船する船の目的地がどこであるかは、知らないが、少なくとも、彼らは、船にたくさんの金貨を積み上げていくこと有能力を有しているという点で、あるいは、そのために、無抵抗で、無批判な人格になれているという点で、現代の船では、りっぱであり続けることができるのである。ただし、彼らの最大の欠点は、船の甲板が、傷んでいようと、帆が破れていようと、もしかしたら、航海上極めて重大な欠陥を見つけたとしても、とくに関心を払わないということである。彼らは、船がどうなるかよりも、目先の労働や消費、あるいは、「負け組」に落ちたくないという現実だけに注視するばかりである。もっとも、私たちが、イメージする「りっぱな市民」としてのソーシャルワーカーも、実は、「勝ち組」にほかならない。したがって、彼らも、「勝ち組」の乗客と何一つ変わることなく、船の傷みなどを気にすることなく、自らに与えられた労働だけしか見えていない（あるいは目の前のクライアント＝社会的弱者しか見ない）可能性に曝されている。ネオリベ号の「りっぱさ」とは、まさに、今日を生きることが、今日を生きることにはしつながらない人びとを指している。

第4に、アリストテレスによれば、りっぱな市民とよき人の間には、大きな違いが存在している。前者は、船（国家体制）が異なれば、当然、そのりっぱさも異なり、完結することがなく、りっぱさは、ある特定の船上だけで実現されるものである。ところが、後者のよき人は、船（国家体制）が異なろうが、時代が異なろうが、よき人であり続けるという普遍性を持ち合わせている。しかし、ネオリベ号では、よき人すらも、平気で甲板に並ばされ、海に突き落とされることになる。もはや「りっぱな市民」と「よき人」の区別をつけることもままならなくなってしまっ

たネオリベ号の船上では、よき人になるためにはどうすべきであるとか、という議論すらも空虚なものである。

アリストテレスの描いた船とネオリベ号を比べ、「よき社会」への道程のために、今、私たちが、議論しなければならない点は、実はたくさんあるのだが、本稿の主旨に従えば、主に、次のようなことに集約されるであろう。すなわち、今後、船の安全を損なわず、運行するためには、「りっぱな船員」をより一層育て上げていくべきなのか。あるいは、そうではなく、「りっぱな乗客」を育てていくべきなのか、という選択である。同時に、この選択は、今後のソーシャルワーカーの役割を大きく左右するものである。すなわち、前者であれば、これまで通り、ソーシャルワーカーは、専門領域の技術、法律、政策など、机に積まれた専門書を読み続け、それらを習得し、資格を保有し、「信用」に足りうる人材になれるよう励まなければならない。しかし、こうした結果の成れの果てが、「今」であることは、いうまでもないことであろう。

それでは、いかにして、「りっぱな乗客」を育てていくべきであるのか。そして、そこでのソーシャルワーカーの役割とは何か？

3-6 「りっぱな乗客」の育て方

たとえ銀行員や公務員と比べ、その賃金水準が恐ろしく低いとしても、ソーシャルワーカーとして働く人びとは、ネオリベ号の「勝ち組」である。そして、彼らの行為も、当然、「勝ち組」としての振る舞いから脱却することは難しいだろう。たとえば、彼らは、「負け組」を前にして、彼らに必要なものは何かと考えを巡らせ、それらをリストアップする時に、「勝ち組」が持っている、「負け組」が持っていないものを、そのリストに挙げていく。そして、「私が持っているものを、あなたも持ちさえすれば、勝ち組になれますよ」と耳元で囁き、供給者として誇らしげにたたずむ。または、「負け組」を一列に並べ、「ここからそこまでは、これだけのものを差し上げます。しかし、そこから、あなたまでは、これだけしかあげません」と、陳腐な権力者を気取ってたたずむ。

しかし、「勝ち組」が持っているものを、「負け組」に与えること、すなわち、「負け組」が剥奪されたものを与えること、より具体的にいえば、「仕事」を彼らに与えることが¹⁰、果たして、ソーシャルワーカーの仕事といえるのだろうか。「負け組」が、運よく「勝ち組」になったとしても（それは、同時に、新たに「勝ち組」になった人の数だけ、「負け組」が新たに生まれている可能性を否定できないが）、人びとの不安や孤独が解消されることにはならないであろう。ましてや、社会がリキッド化し、さらには気化する速度を緩めることには、まったく無力である。つまり、ソーシャルワーカーの仕事とは、そこにソーシャルという言葉を含む以上、分け与えることでもなければ、ましてや人びとを選別することでもない。言うまでもなく、「負け組」を「勝ち組」に入れることが、ソーシャルワーカーの仕事ではなく、ソーシャルワーカーは、時代に即した、新たなソーシャルを「作りゆく」人びとでなければならない。

ソーシャルワーカーは、供給者ではなく、選別者でもない。ましてや「勝ち組」の一人として、

「負け組」に対峙することではない。気化する社会において、彼らの役割とは、社会のすべての人びとの「生産的労働」と「消費」の隙間に、「社会的活動」を埋め込むことである。具体的にいえば、それは、人びとの「生産的労働」と「消費」に費やされる時間を剥ぎ取り、その時間を「社会的活動」に導くことである。すなわち、他者によって剥奪されたものを取り返し、与えることではなく、さらに対象者の時間を剥ぎ取るということをしなければならない。それこそが、ソーシャルワーカーの役割である。

おわりに

ネオリベ化社会において、ソーシャルワークおよびソーシャルワーカーの役割を省察することで、私たちは自分たちの社会がいかなる仕掛けの中で動いてきているかを理解し始めている。すなわち、無駄を省き、資源の効率的活用を行い、分業化された自分の領分に励むその先に、私たちはいかなる希望を持っているのかという問いである。分業とは社会的協業のことであったはずが、いつしか分業の報償としての「消費」を最終目的とするだけの孤独な営みとなっている。そこには協業の果ての社会のイメージが生成し存在する余地がない。

ハンナ・アーレントが『イエルサレムのアイヒマン』で捉えたように、人びとは肅々と与えられた仕事をこなすはするが、それが世界をいかなる風景に変えてしまうものかを考えることはない篤実なワーカーによってナチズムは、ユダヤの人びとを「もの」として処理して行ったのだとするなら、私たちの住む現代はヒトラーを欠いた全体主義の時代と言えるものに近い可能性がある。

欲しいものだけを手に入れ、外部資源を買い続けることで、飽くなき空洞の自我を満たそうとする究極の消費者の群れとして生きるのか、それとも、自らネオリベ号から降りて、新たなソーシャルを「作りゆく」人びととして道を歩き始めるかの瀬戸際に私たちは立っている。アリストテレスは、孤立して存在し得るのは「神」であり、社会を形成しえないのは「動物」であるが、「人間」は異なる要素を持ちあうことで社会を形成していく「政治的存在である」という定義を下した。現代はそこから離れて脱政治化することで、換言すれば、多様な人びとの多様性を社会形成のエネルギーとして合意を生み出していく政治のプロセスに加わらないことで、与えられた業務の遂行（正解とされる業務命令）を行う「仕事人」だけの社会となっていると看做すことが可能であろうか。そこには予め与えられた計画があり、数多の専門職があるが、それらは業務の消費であって、私たちの未来を作りゆく道程ではなく、既定の業務の遂行に過ぎない。

問うことのないところに、思考は生まれない。問うことのないところに基礎は育ちゆかない。その基礎とは、基礎学力のことではなく、社会を形成し続ける「根」の部分である。私たちは、その「根」の部分を失おうとしているのではあるまいか。ソーシャルを「作りゆく」ことを、ソーシャルワーカーという限定的な分業専門職に委ねることで、私たちは自身のソーシャルワークという社会の「根」を失おうとしているのではあるまいか。

“われわれは、世界の中で起きていることを話すことで、それらを人間らしくするのであり、さらにそれらについて言葉を交わす過程で人間的であることを学ぶのである。”

ハンナ・アーレント 『暗い時代の人びと』 36-37 p

本原稿は、2010年9月に英国スコットランドで開催された日英二国間共同セミナー Part1 で発表されたものである（発表は英文で行ったが、今回日本語に書き改めた）。2011年3月に東京で Part2 が開かれたこのセミナーは、2010年度日本学術振興会および英国 ESRC (The Economic and Social Council) より共同採択され、それぞれの支援を受けることで実現した。正式名称は『NPM 政策の衝撃と専門職ソーシャルワークへの視点：日英の経験の比較研究』（"The Impact of New Public Management Policies and Perspectives on Professional Social Work: A comparison of British and Japanese Experiences"）である。

注

- 1 「群れとその外部を区別するという構図は、もっと前から、そしてあらゆるところに存在した」 杉田敦 『境界線の政治学』 173p, 岩波書店 2005
- 2 「空間の政治が存在する。なぜなら空間は政治であるから。」とアンリ・ルフェーブルは述べる（『空間の生産』 59p, 青木書店 2000）。計画通りの出来事以外（= 想定外）は起きないようにすることが、社会や組織の基本条件となる時、我々は彼が示す言葉の意味を知るだろう。ミシェル・フーコーが『監獄の誕生』（新潮社 1977）の中で提起した近代社会を捉えるキー概念である「生政治」概念は、身体を罰する刑罰から、心の内からの改変を目指す刑罰への転換の中に近代社会の本質をつくもの。対象となる心の内を精査する知と、権力が結びつくことで（「権力/知」）権力のテクノロジー化が誕生するとした。
- 3 アマルティア・センが、飢饉へと至る貧困分析で用いた視点。人びとが自らの生命的尊厳と社会的尊厳を維持する能力をエンタイトルメントと概念化し、その剥奪状況として貧困を分析した。社会的集団によるエンタイトルメントのあり方の違いから当該社会の構造分析をおこなった。『貧困と飢饉』 岩波書店 2000 参照。
- 4 日本社会党 Social Democratic Party Japan：1945年に戦前の無産政党が結集して創立した左派政党。野党第一党を続けたが、衆議院議員 15 名（511 名中）に激減し、1996 年社会民主党に改組。支持母体であった労働組合の連合は民主党に支持を変更した。
- 5 2008 年 8 月 26 日毎日新聞
- 6 安全装置としてのチェック機能を余計なもの、無駄なものとして外してしまうことによって、計画は速度だけを至上価値とすることになる。懸念や疑念の対象となるものは、『想定外』の事態であるが故に、不要・無用の無駄なチェックということになるからである。そのようなチェックは『悪意』のあるものとみなされ、奇妙な沈黙が広がることになる。「そのようなリスクは想定されない」と宣言すれば、「そのようなリスクは発生しない」ことになる。さえなければ安全であり続けた……。そう、「想定外の津波」がなければ、総てはうまくいっていた筈である。
- 7 ジグムント・バウマン 『リキッド・モダニティ』（2000 年）。現代社会において、個人的自由の増大と集団的無気力が表裏一体のものとして現れると彼は指摘する。さらに、私的領域に閉じ込められた個人的自由は、人々を横につなぐ開かれた公的領域を生み出すことなく、不安だけ生み続ける。現代における知識は、ピエール・ブルデューが捉えるように、自己利益にとってプラス・マイナスかだけを判断する道具として「冷笑的」「臨床的」に使われることになると指摘する（同『政治の発見』中道

寿一訳 2002, 日本経済評論社).

- 8 「ユダヤ人は、気の狂った大規模な全燔祭を通じて殲滅されたのではなく、文字どおり、ヒトラーの告げたとおり「シラミとして」、つまり剥き出しの生として殲滅されたのだ」ジョルジョ・アガンベン『ホモ・サケル 主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳 161 p, ゴーエーについては、同じくジョルジョ・アガンベン著 高桑和巳訳『人権の彼方に』(以文社 2002年) p 12
- 9 アリストテレス著 田中美知太郎, 北嶋美雪, 尼ヶ崎徳一, 松居正俊, 津村寛二訳『政治学』中央公論新社 pp 38~40
- 10 神野『「分かち合い」の経済学』が就業の可能性の増大(=トランボリンのように何度でもチャレンジし得る)を, このような固着化した「負け組・勝ち組」状況からの回避として描くが, それは, この構造の下でのシジフォスの努力に近いかもしれない。